

【最優秀賞】（旭川地方法務局長・旭川人権擁護委員連合会長賞）

タイトル：心の成長と共に……

生徒氏名：藤堂衿菜

「相手の気持ちになって考えてみたらどうかな？」これは私が、悩みや困難にぶつかった時いつも母が言い続けてきた言葉です。幼稚園や小学生だった頃は素直に聞けた言葉で「〇〇ちゃんは、きっと悲しい思いをしてるね。」と相手の気持ちを考えることができました。でも今、中学二年生になった私には素直に受け入れられる言葉では、なくなっていたのです。正直、自分自身が勉強や人間関係、日々の生活で相手の気持ちを考えるほど心に余裕がありません。そんなことを思いながら生活していくなかで、私は言うてはいけない「ひと言」を母にぶつけてしまったのです。

その日は朝からイライラしていて母の問いかけさえも耳障りだと感じながら身支度を済ませ学校へ行きました。学校でも色々とあり帰宅後は、グッタリしていました。いつもなら弾む母との会話が私の「別に……。」や「あっそう……。」などバカにした口調によって空気を悪くしていることにも気がつかず話をしていたのです。そんな私を見かねた母が「それじゃ全然、会話にならないね。」と言ってきました。「そんなことはない!!」と言えたのに、これ以上、話をするのが面倒だと思った私は自分の部屋に逃げようと、苛立ちを表しながら床をドンドンと歩きリビングの戸をボタンと閉めて聞こえるように、あのひと言を言ってしまったのです。

「母さん、ウザイ。」

今まで生活してきて初めて母に言った言葉でした。とんでもないことを言ってしまったと思う気持ちを感じながら自分の部屋の戸を今度は、静かに閉めました。すると母は私のとった行動に納得できずに、すぐ私の部屋に入ってきました。本当のところ、この時には申し訳ない気持ちの方が大きかったのに私は意地になって「勝手に入ってこないで！私にだってプライバシーはあるの。人権侵害だよ。」と叫んでいたのです。すると母は「文句だけは、いっちょ前で何ひとつ周りを考えずに間違った権利だけを主張するのね。」と冷静にその言葉を残し部屋を出ていったのです。

私が中学一年生の夏に、人権について考える機会がありました。その時たくさんのことを調べ勉強しました。一年前に調べたことを書き残していたノートがあることを思い出し、見返してみると、あるページに「人権とは、人間が人間らしく生きる権利で、個人の権利だけを一方的に主張することではなく、お互いを認めることが人権の基本。」と赤い色のペンを使って目立つように書いてあったのです。私はハッとしました。少しは分かっていた気でしたのに私が主張した権利は、単なる自分勝手な考え方であったこと。そして、一番大切な相手の心を分かろうとすることを忘れてしまっていたこと。私はとても恥ずかしくなりました。それから私は、その日の出来事を考えました。私の言ったことや行動で母を傷つけてしまいました。でも母は、そのことに一切ふれずにいたのはなぜだろうか？私自

身が気がつき反省するのを待っていたからだろうか？などと色々なことを考えました。私は今、だんだんと子供から大人へと移り変わろうとしていることを実感しています。もしかすると母なりに私の気持ちになって心を理解してくれていたのだろうという思いが強くなりました。けして、我慢をして今をやり過ごすために黙っていたわけではないとも思いました。そのようなことを考えていると、これに似た思いが頭をよぎったのです。

私がバスに乗り、席に座っている時お年寄りの方が乗ってこられると私は席をゆずりません。断られることもありましたが、それでも席を立ちます。「私が我慢すればいいんだ。」なんて思って行動したことは一度もありません。それは私より、はるかに長い人生を生きてきた方に敬意を払わなければならないと思う「心」があるからです。なので私は、お年寄りの方を心から尊敬し、このように理解しているのです。これが私の思う基本であったことに気がついたのです。

私は今までのこと、すべてを深く反省しました。そして気がついたことで、心を豊かにすることもできました。

私が思う人権とは、言葉で立派なことを言っても意味がありません。ひとり、ひとりが人としての「心」のありかたを考えることが大切で、大きな気持ちを持ってお互いに理解し合うことが必要なのだと思います。

今年の夏も、たくさんのことを想い、感じることができました。また一年、二年……と少しずつでも心の成長と共に理解して学んでいきたいと思っています。